別府大
NOV.2 1.
図書

佐伯史談

第一〇四号

「郷土史研究」誌
通算第一二六号

昭和五十一年一月廿四日発行

佐伯史談会

事務所　佐伯市大字稲垣字龍護寺　羽柴方

論説

年頭所感

佐伯史談会
会長　髙木嘉吉

人は生まれ、人は死する。人類が地球上に出現してから何万年か経っているが、不老・不死の人は一人もない。生まれ、死するだけだったら他の動物と異なる所はないが、その間の生き方がちがうわけである。

「人は生まれ、人は苦しみ、人は死す。」と唱えた史家がある。東西の歴史に数多く記されている奴隷（どれい）の境遇には、あてはまるかもしれないが、我々の史観とすることは出来ない。

「人は生まれ、人は楽しみ、人は死す。」はどうであろうか。平安貴族の生活はこれであったかも知れない。しかし彼等は、富貴・権勢・恋愛に身をこがして、真の幸福を得たとは思えない。

生と死との間に何と入れるか。これは私にとって年来の宿題である。古稀を過ぎて、我が人生も残り少なと感ずる昨今である。そろそろ結論を出したいものである。

「人は生まれ、人は働き、人は死す」とうたって見た。平凡で反論も多かろうと思うが、これが私の人生観であり、また史観である。

生と死の間に他の動物も活動している。しかし彼等は自己の生命と、種族保存のため本能的に働くだけで、進歩も向上もない。猫はいつまでたっても同じ猫である。

人は「よりよく生きたい」と念じて働いた。ドイツ語のクルツール即ち文化活動である。このため自然に働きかけて、生活に必要なものを生産した。農林・水産・牧畜・鉱業の起源である。かくて生産されたものを、第一次の文化財と呼びたい。これをよりよく利用するため科学・芸術が芽ばえ、集団生活の規制

本号の内容

巻頭　年頭所感（髙木嘉吉）……一
随想　わがふるさと佐伯（月本繁弥）……三
〃　ふるさとの海（片岡博）……四
記録　富尾神社の夜神楽（羽柴弘）……五
〃　塩見国二氏の宝塔（柳九勇）……八
〃　秋月楊翔と震来飛震（大隈茂勇）……一一
〃　大神惟基と海長佐伯長基（佐脇貫一）……一五
〃　藩政ふるさとの絵付（安部弥右エ門）……一九
〃　私の姓氏考（浜谷権太）……二三
〃　藩州佐伯村おぼえ書（矢野徳孫）……二六
〃　ふるさと「元田」誌（市野眼仁）……三
〃　史実と小説の間（御手洗一雨）……三七
随想　佐伯育樹と高岳人貨論
紀行　北九州歴史の旅より（富沢巌）……四〇

佐伯史談総目次（昭和四九、五十年分）
佐伯史談会の研究活動近況
入会・退会・会費増額・年刊のこと
集会案内・積助寄付など

として道徳と、心の安定を求める宗教が持たれるようになって、文化の体型が整って来た。

かくして、高度の文化活動が行われ、高度の文化財が生産されるようになった。これはわが郷土においても、縄文・弥生の原始時代から、白鳳・奈良・平安の各時代を経て、現在に至るまで、郷土人の歩いた過程である。

先般（十二月九日）勤労青少年ホームで、南郡・佐伯市の文化財調査委員の連絡協議会が持たれ、県教育庁の文化課第一係長の後藤正二氏の指導をうけたが、後藤氏は文化財として次のものをあげている。

(一) 有形文化財
　建造物（石造・木造）　絵画　彫刻　工芸品
　書籍　古文書　考古資料　其の他

(二) 無形文化財
　芸能（演劇・音楽）　工芸技術　其の他

(三) 民俗文化財
　無形の民俗文化財（風俗・習慣・民俗芸能）
　有形の民俗文化財（上記の事項に用いられる物件）

(四) 記念物
　史跡（史跡・遺跡）
　名勝（名勝地）
　天然記念物（動物・植物・地質・鉱物）

(五) 伝統的建造物群
　歴史的風致を形成している伝統的建造物件
　周囲の環境と一体を成しているもの

(六) 其の他
　伝統的保存技術　技能

郷土に右の区分に該当する文化財が豊富に存在することは、心嬉しいことである。

私達の史談会は、温故知新の旅を続けて、郷土の歴史と文化財を詳細に追求探訪している。とくに文化財については調査とともにその保存顕彰の手が打たれねばならぬことも痛感している。

幸いに三の丸櫓門保存会の後をうけて、佐伯地域文化保存会が結成されて、若干の財源もあり、いつでも活動出来る態勢にある。今後は、会員及び各地域の文化財に関心を持つ人々と手をつないで、会の目的達成に努めたいと思っている。

拙稿を終わるに当たって、駄句を二つ。

年頭に　文化を語る　また楽し
初歩き　歴史の跡を　尋ねばや

（おわり）

紹介

佐伯市・南海部郡内の歴史・文化の研究活動

去る一月十一日、蔦江町畑野浦の畑野浦史談会は、富沢会長以下二十数名の全会員は、寒風をついて畑野浦を中心に、楠本―竹野浦河内―蔦江浦河内とめぐり、古跡・古塔の調査をした。本会から羽柴・軸丸が参加し、なかなかよい研修会であった。畑野浦地区には本会（佐伯史談会）会員が十六名あり、その人数といい、研修活動といい目覚ましいものがある。

直川村にも郷土史研究会があり、柳井氏はその研究をまとめて、郷土資料集を次々と教育委員会から刊行している。佐伯史談会員十一名

米水津村には史談会組織はまだないが、村教委の高宮主事が精力的に動き、勉強熱心な高橋先生があって講会会によく出席されている。村内には本会々員が五名ある。

弥生町には昨年「弥生町の歴史と文化を守る会」が発足し、十一月末宮崎から石川恒太郎先生を招いて講演会を開いた。もちろん本会会員二十六名がその主体となっているが、今後の目覚ましい発展が期待される。

宇目町・上浦町・本匠村も動きはじめており、鶴見町やや低調、佐伯市には、市内で独自の動きなどおまり出来ていない。妄言多謝。（羽柴）